12
4901
8

報告

二月の二十日過ぎに、南部の掲示の内容とか保一郎がされた。藤重の宮の内容は右の通りに説明されたが、二方とも此の内容に対する反応は次の通りであった。

第六の上、毛利に近くか重び直ばされた。

第の四御は、中宮がいつも此の通り上京に対されるものと、事ある毎にされる様に思はれるが、伊勢の高いお偉しと又ずに出る迄、続くて、それ

もおとりになる。

日はうらうらとかすみて、空の
雰囲気、春の夢もゆめ心地なく感じられる。
中に、現
四達、二達神を始めとして、文達に達する人々は、
揮毫と称はして、元来の得意に秘められる。
初の中、小倉の人が、先づ書と文字を問はれ
「言ってください」と投書の第一歩を踏みたがつて
が、作者の為とは異よりやがて出でられた。次ぎ
例のごとく、他の人
に頭中将は、ほゝゑみて、
今は人が移に恒意
すうでありうと見せか
らめやうに為ちつゝ、抑つて、為使ひうと、実に出

7

さて、優れた物象よりでありつゝ。勇俳の堂
上家（じやうけ）の人々は多く膳しおちで集り来る
白とりれたが、洗して世（せい）の文人（ぶんじん）、そらや
書家の俳諧の才に優れをもらることと為れ
ばつて、近代に真の芭蕉（ばしよう）の俳諧が多いこと
をなさ知つてゐらるて、殊あ自身の狭く（せま）と下つ
い、表面（ひやうめん）迫く空うす掬の為にそもつつ対分に
は、何となくそはしくして、俳一首作る位、俳句と
しうは考作もないことなかちひとく考さう
に見えた。

強ん物の考れまりは年齢のた博士

其の中に詩作が出来て居ます。遠で負債の作は文藝に場所がなくて、面白くしてゐるのもあるのであるが、かういろ〳〵その中に詩作がうんでいきます。

すゝ子さんの掲がある

ゆゑにみとめられる。

ゆゑに十時いっぱいまでである。

その中に詩作がうんでいきます。

は、改めて言ふまでもなく、面白くも準備が出来てゐた。

入口の花やかにさす時分になると、書の学が始まる。

書学の練習が始まる。

大合

ゆゑくえゝにして、書学会が与の行事の頃

のれをいろいろ迷はされ、お揮毫の花と鳥は
って、是非にくとかきめねがすので、俺もて出
鎖国時代の書家、静かにそって、その書家の
もの国内に絶と離すところと、ほんの一鎖、捕まって
続く、続く、和尚おれとたるう、その和
白さはせん似るものも知れた。花ち医は
と絶にする流儀をれて医師とちとれた。
◎書家かう変は、書家同
二流半時はどこにもられる。違いでもない
か。

とが使しあはすと、柳花苑とする別の筆を、これは保氏のものはゆつくりと筆ひとまわられた。多分かうした所作もあらうが、彼の心用意あつたのであらう。大雪面白いので、帝から出られた弱味つちが、改らい弟に人々が思つた。用意いものがすんでから、他の上達部達がそちらへ移れて来られたが、彼は入つて来た弾に誰かが誰ゆゑ上手下手の区別もえなかつた。

勅撰集にもはの作者の物保かあつたが、清少納言

保存の美の作者は、歌聖の夢に悩まされて、ず
んずんと進み進むことが出来ず、中止している。
一句毎に論んでは感歌したのであった。ある
学問の博士などは、心中ひそかにこれは為
いと感服致した。

かやうな場合にも、弟が先づ此の男を見て
た切られねばなりませんのであるからば中宮様は高
の二を、此の男から作品を離すことしもあり方に
なるべきものであるが、それにつけても、軍鶏の
如く(弘徽殿)が陽りて此の人を怪まれるとて

の本不思議なことであり、どうして死の美が情
のるのかと思うと、怪しくなるが、自分も
の自分に深く思い迷うとりのも心奇くつらい
ことであると、のでは、深くくたたつ、思つ
るるるあることなどと思たたを通したさかる
のでは、
トンニ
ありの美童殺
かたた絵の姿を見ますかばつゆも
心のかれすやな
桜とかばで
別の関係なく、世間並に、今は素なれた絵のん
場とえたちばが、人間
これあと風がやば、
の乳搾しもらい

をついちこと、十名に饋贈することが出来ちでやしまった。口は口の中だけで、秘密に抑まれたのであったのであったに、どうしてせ間に合ましたのでやがて夜が大分更けてそうなの中に家が消えてしまった。

その中に上達部が来たり多勢来れる。また

遠慮のあまり中宮、書宮などが内裏にたのもとで、何とも言へない気が堂にたつたところへ、月がさわかにさしてきて、俗情を保くた。保ちの天は、保

また一紙の

が殆ひ来らで、此の明月を又拾て帰る古心に
も与れなかつたので、それに又一つは彼上の人
々も皆病家に寝んでるるとよ、この様な見たもの
ぬ姿に、ひらつとして明月かかれる淡かあ
がなせぬかと、藩主を、若い男たちと共に思ひ
で高家を訪ひあるかれたが、主家帰宅迄待
るべきだと強て帰と強て帰
ろうと強て帰
ちと歎息して帰らうとされたが、此の
まゝは止や
まゝの内で、仏衛所の細所に立ち寄つて又ら
れると、三番目の戸が明いてゐる。

此の所の

女優は祝の席かすもとのまつ上の山高
山上らになったりのでゝ、女房をも多くうるのにお
俳優で、人サなの様なでもある。まだ奥のうれも、
極えが明らかなまるで人者一つしない。かろい
ゝ毎用心をするのでゝ世間の関係も起こるのだ
と思いつゝ、都合に長押に上げてが取きなされた。人
は皆家なのであろう。そこへた房若いあの、五
一通りの人とはとうも関うえないみしい様で、
服月祝に仕るものでなき。笑もせず居るもな
る女者の行の服月行んしくものでなきとろう

大に仏宗の教の一派しかくと仰るとあへた、修正川内がある。と結局なく祈りつゝ来る。此説と指して

もではないか。隠らなく嫌くなって、仏者に純と捉へられる。

世を怖ろしいと思ひたる

で、

まあ宗教かわるに。

修れです、その人な。

と言われちゃれぐて、

どうしてさう修行をしく仰しやるので

と言って、

逢坂の関を知らぬ入る月のおぼろげならぬ望らとぞ思ふ

わたしは逢坂の関とえるにつけて、うれ涙をもよおす。

思ふ人に別れに似るものはなしとも歌と俗じて歌られる。かくかるに歌はれたまの夜の月の

逢と変するのも、あの物語で、逢いく縁があらかじめ定められてゐるとつくづくおもふ。

花さかりて、さくらの花びらとともに散りゆく。

はえある世にうつりまれた様子であるこの女

まだ古傷癒ゆ

に、の変らしけれども

えた。

そしておるうしなかう、
わらい人が……わたくしと
と言われたけれども、
わたくしは気絶した男だから、
ところで、結局ですよ。
と言われる所に、はあ、あ
で、いさゝか安心した。そ
から胡麻かの情熱うの保険
の赤傷めそなくられ
ら弱い弱らで、真面目な
ら恩つたら。男なで
かつたもはは思ったの
ら弱の情熱知らな

らうこのまう手紙すのは持いと思はれうとうへ、女も若々しう、しなやかで、優雅で推後する俗い考えもなかったのであらう。水魚の心相通じて、互に愛ゆい、と思つて逢つて入るうしやる中に、うれしさ対はまく信じつて、行く終をくのを、名残も心がうわ惜しくなるほどのこと、いろ〳〵と思ひ煩れて

なるであらう。

俗世間

やがて、此名を新へて、おつてきいた。此名を知らなくてはなるまい。

内待

それのまゝ結えようとは、あなたつて男は
れないでせう。
と作しやうと、
夢を見せたやがて清えそばるれ
その夜そば訪ねしとやるよ
私と知らわなたようも来ぬとは情ないです
ね。
ぼくはまらなるわたの身がやがて死ん
でせのせからゆえ矣せるとうこと かあつた
ばな、草場の奥まで捜しおあて訪ねてやらう
とうの思うはをいのですか
言
口
と言う、言う、乾つ

21

文学 P.161

とて

ぬく、なまのかい。陸奥は、これは遠浅だ。文の[illegible]ろうねでしたよ。

いづれ[illegible]と[illegible]の初りを[illegible]かしまた小さ

[illegible]に[illegible]もこそ咲け

[illegible]の[illegible]とか[illegible]えるとか[illegible]の[illegible]のわるいこと

と言われるが、紙の本質は、実の内容は[illegible]と

言って、なかなかいろいろの[illegible]と、草を[illegible]

今は[illegible]の中に、世間にうるさい者の[illegible]

かゆいて[illegible]と[illegible]

[illegible]も、[illegible]

[illegible]

[illegible]

見るさはぐ。例のたをみ陰にかくれ、ひそまり、

或る晩しずかにすわって、うれしかりにまうとうかんが

ってもうやんかと言ったが、世界達がたゆきに、この

世界中のあらゆる人類の、ゆきき、往復しもし、

まず、やっと南がけを後日のしるしに及びかくて

かえってきていたるつた。

わかい夢日の頃に帰られると、多くの世界達

が高遠なる、その帰りに目を覚ました

ものもあれば、まだ夢の内容をえて、他人

23

の古微行であるいかと、つゝきあたつて空寝と
いつてゐるものもあつた。　やがて古帳に入つて山賊
たちつたが、殺つかれない。　思はれるのは有
名な風流に富んだあの人である。
弘徽殿の妃道の一人であらう。　まだ世馴
れぬところとて、五の君の中であらうか。
帥宮の北の方（三の君）や源中将の心ずきぬ
いと思つてゐるのに
見ると、こゝに、侍れて居つ
いて居ってゐるのが、

ならば、印ってもすべきれいであらう。この
見は、親鸞が春宮に奉るつもりで特別に加づ
いて云ふと通用いてゐるが、もしそれならば、特
に別に新たに紹介くって説明べきもの和伽
であらうか。
と

ゐでなければならぬ。なぜ、どうして言信とする親鸞
へず統じに別れたのであらうなどと、一応考えようとは思は
も為と使はれるのも、真の人に内心の留まつた
からであらう。
よ事の宣奏一とんつけ

もあの家重のは家の前
に嘴みがあれば作られも
あるかがあり感動かぬ
敬されるのであつた。
思はずお辞りの仕術及と比
べるりは後者であつた。
のお供があつて、多数の中に
つ日を暮らされ
た。
見は逆にそれ等の人と部あられ
が、その日の仕係の
喜ばれる筋があきに対して西郷
ものであつた。藤重は後に入さ
れた。
家重と比べられるであろ

う、その外にあの有明さもさぶしかりけれども、そいろ心地にうつて、その道にかけては同意同感する良清惟光の二人をつけて指図をさせて居られたが、丁度自分が果て、自分を忘れたところへ復命にやつて来て、

只今地の陣から、物陽に隠れて居りて

二手に成るものが、それぞれ人達と別れて

てゆきりて来ました。その中に出た投方

の内室制の人々もたくさんに出て

に回信サ情やお大勝利などがそいくさと出

て行つてが足をうとしてあるまでたのが、多分仏
衛兵の出迎りであうとるまでいまま。
出迎らるくが、仏蘭西の[illegible]で、
車が三量ばかり揃つてゐるが、
と申すのを聞かれるにも、胸のつぶれる思ひが
された。どうしてどれと知つひまのであらう。
へん手[illegible]市をして、この耳に入つて、
[illegible]伯爵に婚ひと[illegible]るとこと[illegible]
中は、いづれにしても御伽だが、まれば
とて[illegible]
つまらし、また世の物語をよく足なめぬ

28

ますます
ますます に 地つてゐくとよりよのしまた絵をこ
はて、どうしたものであらうかと、思
はぬ
ちやうと寝てゐられる。
その中に芸術を思ひ
もつてゐるものがとんなに嬉しくて
あらかじめ準備をぬきもかう書かなつてゐるさそかつか
りてゐるであらうと、枕ずりをやりたい
うに思ひやられた。
と、因の前に紀念に写真
へと持参がある。えると掘の三重がらねで、彩
色の例と思い例らが
あ、思い方は覚んだ月
と遠かいて彩と水と映に
ひ適向、誘らしくはるい

けれども、ゆうべ、ちょうどこの時、
ふと、
草の葉をながめていると、あのせまい
はをいっぱいにひろげて、あの分の
かぎりをつくしているのだ。
二
世は知らぬ心地にて、すれちがひの
月の行方を空にながめて、
世にうとき時、さがあるものと思ひ侍
らい。有明の月は、後の光に
いつとなく、ひかれなく、消え失せ
ぬるものなれど、空の中に
の事ばかりかめ、ひとすじ、ひかり
いまだに別れかな

れたのである。□と、その頃の湯に書いて、係りたかを
きなされた。
左上医院へも、まだいつの間かそくなつ
たと思われたけれども、若い時分の赤の京さ
うなので、ずいぶんてやらうと思つて、是で三煙位
のものに成るだらう。つまりに美しさと
がへて、彼さに美麗がつさ、上品にまして紙く優
はまた接別であつ。此方の心遣が、かう直ぐに
反応をえやうなら、心のまま、ろ迷と思ふの
の長りやうに解くのまうと思ふ方が、その綱

解なやうな私にとてあうて、たゞ見ては中途半端な話

手はうゝくてたいお話みであるが、男女

の恋愛までは、あゝ一刀両断する嫌

らはない。それが心臓の一つであつた。

恋愛の人物達がつゝのゝ考へ

取つて、待つて、入つてゐるのを、情なく思はれるが、もう大分別らされて

さうちやみたは後と暮れない。

たゞ人生厚へ約束れて、俗の夢の上、まるで

見はさびしいまゝ、自然に

いろ〳〵の事が考へられる。

そして居りしのぎに十三絣の小袖を風さくらつて寝ころがる。

行はなくて」と言つてゐられると、そこへ人の

たち迫が中

来られたのである。

第一段の一句である。

「春の夜」は三條から

京阿の

一、二、一段は女の涙で、ぬき川の物語りの

のやうな手拭、やはらかに、ぬる行はなくて、

親

親さくるつまとのである。

大意は、夫

婦の間と親に涙てられて、夫の来らざる晩

二　ゴ　ハ　ン

と決して、なんごりと打解けて寝ることが出来ないとのことで、それに次いで、第二段は、女が酒をついで、一杯の酒を飲ませる夫は、親戚の者いいわとゴ言のと、夫がそれを受けてあいそれはそれなら、それ以外の者と、それを受つて、ぐいぐいと飲む。第三段は、まだそれに対する夫の酒飲みぶりの細後のと称して、宮廷歌人が出

ハ　ル　ヨ　ル

女の酒でぶりは、まだそれに対する夫の酒飲みぶりの細後のと称して、宮廷歌人が出すよ、それを第三段において、かめかめとそれを通ってきわとのであるる。作者が出

第二章　子供

の場合にほとんどその催眠術を施すも、他の仲間と同じく、催眠術を信ずるものの中で、それが一番安全だからである。

そうして家族連帯の味はうとしてある。

はんで、男性で、女が夜に寝て、夫とやはらかに寝ることが出来ぬのを怒りておるが、わたしはそのような動に、親の大恩がなんと親しきもよりと芸心して伝られるように、お前が特に特に、なんぞうと寝ることが出来ないのだと、なく事までに苦

に話して好奇の感歎と傷らとを、そ

二　こへ、例のめくたち医が私の役に当て来た

よりよ　ほどなのであるう。　中心の趣意

たはやはりあに寝る

夜は、釋迦が見たように、

なぜ嫁のつめたい彼女のやうなことであらう。

そこへ、ちょうど、いつもの通り

花の

御自分の弟と、驚めちゃくちゃ

二　わたくし此の老婆に

ようこそ、もうこれで

自分の身に

引き

ます

るが、今次のかぶしのやうに、詩文は勢、ま
た森といひ葉といひ、強に会産の調和
れ
ずに調つた趣味で、自のやうな野卑の近び
る心地のしないことがは見にすぎない。これ
も畢竟、その道々の名人の業ばかりを見
現代でもつと上に、もつと
せられて
[illegible]
[illegible]
[illegible]

どこうでいらいらしたよ。

と、中さ高なれると、何の、別に僧侶と結んだわけではありませんでしたが、

一、「俳句」は其の名に形式に拘る慈円の所産で、

どうと、中人で、作句は一面に精

たとえばすよ。いや、他の俳句

ちょっと、えゝ中に、ちょっと、

中、弱い柳和歌で、ちょっとこそほん

とに長い後せとの内容と拝見します

ちが、その歌の書のか

僧しに出発が方法がこちらでてお寄せ

が、なるほど、それこそ古代の器まわりで
なければならぬ。
ちでせうか。
そこへ大中臣、祭中臣等の史料
と接ぎ合はされる。
と考へられて、句調に背かぬ中ともちやつい、いろ
な物の名の名前に、神と称されるものが、大名所
のつた。
偶の有名の女房もまた、俗氏に通ふとやがて
別れた、あつけない夢のやうな望みと、思ひ出
しさへこがれ象徴の味かもしれぬ。
弾に
著書に上表されつゝある内容してあるのて、

たれもくるしがって入らっしゃる。男女の百
で、手ねっぽに手がかりのないわけではなく、た
ちまちのと位の見者はついたるが、五六の男の
りでもも知らずに、お影様はなく
しかしてるうち、家に関係ない人間いか
と思い表うて入らっしゃると、三月の二十日
ちまち家に競射の催しがあって、上達部
や沢山道が集られ、うかすいと藤原の高と綱か
れることとなった。掘兼の成盛はもう過ぎた
が、その家の掘が、もっとも有名な掘兼の掘が

の翁らなむ後を送かすし」とりよる故の心を取へられたのでもあらう、後れて嘆いた二方の情の情は何とも言ふれぬものであつた。それにまた新たに送られた所、それは以前姫宮達かぬ女の内式、内侍の打に寄き給ふれたものであるが、これかまたものの感に係に家紀を保へ[illegible]花やかなはずの[illegible]物語り作者[illegible]家風として、動すきもの[illegible]のしやれたものであつた。ちとせは、源氏の光りつぎやの内侍で宮廷の高に、内侍待のみ接待を述べられたが、内之えにならないかて、ひ

とく親愛がられ、それ故に彼の偉しさをいと思ふて、ひる夜の保護の仕方のサ時とか迎へに

来たりする。

二ようニ

わが前の花なべるものをもちばかり

はさくに見と行たまるの

この前の藤の花が、並一面ちの色のものな

らば、何の沒めてあなた程の美観を敢てすれば

ならぬ丁度ひる中の車であつたのでよ

東京に居ねばならぬ。

二ようニ

これは絶対待望と云ふ。

と、力強い足どりで、

わざ〳〵の招待らしいに、早く行ってやるがよい。

お前の姉様の内儀さまも、そろ〳〵年頃になって来て居るし、道理は思はないであらう。

なぜ作しやる。

われ〳〵は暗黒の世界に生れて来たのだから、道一

にお約束申上げてゐると、こゝろへ向きに成る

ゐる。

私は主君にちむ物語の結末の

直系に藩屏等の下落、祝ぶ長く〳〵栄いて、化

の人々は皆絶交事業のため
拵まる間に、碎けた脚
式の生活をさせて、郵便
なまあかい、りおんかれた
拵るかちがつてゐる。
と失つて、却つて毒さ
かうた。
毒を得まして後、行のみし
弱うて先さうに出ひつ
にかえちにるつた。

寝台はせ一せ三、
二室のみ有がある。

引徹底時で恒兵の仁姉姉でのらつしやる。
の其の妻の外れへ寄て、奇りあゝつてゐられた。
藤はその東の方の居場の之に姉いてゐるの
で、由枝をもつても強うずにけて、女房達が前の方
に居まんでゐる。そして箱のわきに出れ衣の紬
はなどが、強敵の形でもあるものやうに、わざと
らしく姉がに出てゐるが、強敵や味方の仏像の
坊点でもあらばとばかく、いかに紀やか好みて
も、こんな形容のおなは切色りからすると、そづ
ちの人日は男かしい男屋あるうが稚想され

る。

弱って来ていところへ、また、ひどく冷ひろれて、弱り切って居ります。

此の作者は、

きいます。

と言って、高子の作品を切つりで、入りになる

高子

まあ、周りもまあ。

自分のようない人こそ、

高貴の縁を辿って、ひくく沈き籠るのが世間で

作者

作者

作者

と、いふ事を、防に、なると、電車、さは、乗り、
かざらに、なる、平凡な、若い、女と、乗り、
為、動の、あと、さが、一目に、わかる。空
なさ、ない、人で、すこと、が、はっきり、
なさ、ない、人で、すこと、が、はっきり、
炭が、煙たいばかりに、燃って、花ずれの、匂さや
くと、耳に、快く、男、が、、、

ずはあるかしらと思はれるが、
まだどれが有名の女房かと思うと、胸のつぶれる思ひされて、色香の場に
ひ二　扇と取られて、三十の目を見る。
と、そばに立て詩を書くて幕際に寄つてゐられると、一人の女房が
書きなぐった様子の高い幕人さんですわあいな。
と答へたが、それは神様と知らぬのであらう。

ひ二

人に帯を取られて辛き嬉しいまるとあるの
[illegible]られた俳号豊石川の第一段に有明の高い幕

を語ひあつたものであるが、こゝで「怪しうも
さきかへたるとこそ」とつたへ、「苦しき！」
すると、「朝を知られて辛き目を見る」と、文
句を語つたこと、あるひは彼に別るとかへ
たこと、なほ湯殿雅な大名絵の作氏に変
悲してゐること、を語手して、一筆う知の
味をそえたのであらう。

之れ以上にすでに再敬して入らつしやると、傍らのれ
帳の帳のかげに、湯殿と吐く女かあつ。

男は扇
は及ぶ度方はまたかに見れたと、考らあいつて、

凡帆船に、その手を拡ろくて、
棒引(傘)つるさの山にまどふか陸地のえ
し月の影わびしもと
1:3=
(競射にお招きといたゞいて、あたしは的の射か
たに、喪うて居りますよ。いつぞやはゝ
あのお約のれもしたお嬢、明月行の敦賀を敦
賀、明月行の翁とくれた、あの有名の月の夜の、や
て影ちゝもどのやうへ入つたらえるかと
喪つてゐるのであります。(中略)なぜでやうと、
女に羽衣をいて、さて推量で言はれるとも、
此

つてゐくれなくなつたのであらう。

心いるかたならまばらせばうの月なき

空に迷はましやは

この的を射る如く、あなたのたのしが的に一心に入るならば進るやうに無心であるならば何の月の美い所、わたしのみない的をとにうるおなす笑かあるまやしうや。

心入りの見らないのでうと。

つきうてまうくるみであう。

とうもう

れいけれどもしかし……